

批評と紹介

歴史学

新刊紹介

この一年間に読んだ歴史書のうち一般的なものを2・3紹介して責をふさぎたい。まず初めに、

「フランス政治史」横山 信 (1870—1958) 福村出版, 1968年5月

著者は東大法学部教授であったが、まだ42才で学者として円熟期に入るところを昨年急逝され惜しまれた。前著「近代フランス外交史序説」(東大出版会, 1963)はその手堅い学風により高く評価されながらも、他方で堅実なあまり、著者の問題意識が必ずしも明確でなく、全体を読みとおすには忍耐を要するとの評も聞かれた。私も同じ感想をいただいたが、著者の他の論文から判断して著者の問題意識は希薄などではなく、むしろ今後のため準備作業としても前著を完成されたものと判断し、その後の成果に多大の興味と期待を寄せていたのであったが、急逝により本書だけに終わってしまわれたのは残念ではない。(他にも執筆中と広告などで仄聞しているが確実ではない。)

本書の内容は題名の通り、最近まで約百年間のフランス政治の概観であり、1870年の第二帝制の崩壊、パリ・コミュン、第三共和制の成立に叙述は始まり、いわゆる古き善き時代、世紀末の動揺と不安、第一次世界大戦の高揚と幻滅、戦後の苦難、ナチス・

ドイツによるフランスの敗戦、ヴィシー時代、第四共和制をへてドゴール將軍の再登場による第五共和制の発足をもって筆をおいている。

はしがきに著者も記しているように、このフランスの百年間は、丁度日本の明治以来の波乱に富んだ百年間に時期的にも一致するが、内容的にもまた、政体の変化あり、敗戦の苦難ありといったように、この百年間はフランスにとり波乱に富んだ期間であった。その間、フランスの文学、美術、科学、技術は全世界に影響を与え、大英帝国と並ぶ大植民帝国が興隆し衰亡した。他方その政体の変化の目まぐるしい実験は世界を驚かし、イデオロギー的衝撃は各地に及んだ。(大戦直前の日本における「フランス敗れたり」式訳著書の一時的氾濫を想起されたい。)

しかし著者は政治史とことわっているように文化、経済といった側面はとり上げず、対象をもっぱら政治的發展に限定しており、その点では本書もまた前著ほどではないが地味なものである。また九十年間の諸事実を三百頁足らずに圧縮した通史という性格上、特定の事件についての詳細な説明を本書に求めることは無理な期待である。そのような要求をもつ人にはクセジュ文庫中の諸書が適当であろう。

しかし通史として見るならば、限られた頁数の中により多くの事実を盛りこみ、適切な論評を加えており、注意深い読者ならば多くのことを学べる筈である。逆に言えば本書をすみずみまで理解することは容易ではないということにもなる。著者の得意はむしろ第一次大戦以前、すなわち前半期であり、私の専門はむしろ後半期であるため、私は評者として必ずしも適任ではないが、本書が日本人の手になるこの時期の通史として最新のものであるばかりでなく、もっとも信頼のおけるものであることは申し上げられると思う。巻末の参考文献目録も便利である。

つぎに、最近いわゆる「安保闘争史」関係の出版が相ついでいるが、そのうちの一つ
児島 襄「国会突入せよ」、講談社、1968。

筆者は最近名の出ている軍事評論家、戦史家で「山下奉文」伝などを雑誌で読まれた人もあろう。

戦史家が安保事件について書くということは一見奇妙に思われるかもしれない。しかし僅か8,9年前の未だ記憶に新しい事件について、あまり専門分野にこだわる必要はあるまい。ジャーナリストであれ学者であれ、当時の学生であれそれぞれの立場から書いてよかろう。

ともあれそのようなこだわりは、巻末の談話聴取者の長いリストと参考文献目録を一瞥すれば霧散するであろう。大衆週刊誌に連載されたという本書の成立事情が小説的記述という欠陥を生んでいることは否定できないが、それが一方では、個人には容易ではない広汎な取材を可能にしたことも認めねばなるまい。

内容は、5月19日夜の衆議院における安保条約のいわゆる強行採決に始まるが、記述

の中心は、6月10日のハガティ―事件以後、6月18日の条約の自然成立までの約1週間にあり、とくに6月15日の国会突入事件、樺美智子の死の前後に焦点を合わせ、あわただしい政府与党と警備陣、対策に苦慮する社会党、乱闘、動かない労組など、あたかも一つの戦いのように、生々しく描写されており、その迫力は恐らく中途で巻をおくことを困難にするであろう。戦史家としての筆者の力量が十分に発揮されたとも言うべきか。

しかしそのことはまた本書の限界を示している。本書に安保事件全体の評価、意味づけを期待する人は失望するかもしれない。題名の示すように著者の意図は別のものであり本書の扱う対象は時間的にもはっきり限定されているばかりでなく、さらに著者は意識的に政治的対立の圏外に立とうとしているからである。ちなみに、樺美智子の死因に関しては人なだれによる圧死説と警官扼殺説があるが、著者は両説をくわしく紹介しつつも断定は保留している。なお、池田勇人がこの時デモ対策上の最強硬論者であったという、のちの「寛容と忍耐」を売りものにした時代しか記憶しない人には意外な事実も指摘されている。

しかし私見によれば、そのような著者の態度は逆に本書の長所にもなっている。何よりも重要なことはまず、事実がいかにあったかを正確に知ることであるとすれば、本書の詳細な記述のもつ意義は決して小さいものではない。諸勢力のそれぞれを性急に断罪し、あるいは称揚する前に当時の具体的状況を冷静に理解することが重要であることは多言を要しない。本書はそうした努力にも応えるものを持っているように思われる。

田辺 保「シモーヌ・ヴェイユ——その極限の愛の思想」、講談社現代新書、1968

最近、日本で紹介書がいくつか出され著作集まで邦訳刊行されているシモーヌ・ヴェイユについては私もこれまで名前は散見することはあったが、まとまって読んだのは本書だけである。したがって本書の出来ばえ、価値を論ずる資格は私にはないし、そのつもりもない。ここで私が考えたいのはヴェイユという女性自身の生き方、その現代にもつ意味である。

ヴェイユの略歴を本書によりかいつまんで紹介すれば、1909年パリに生まれ、フラン
エコール・ノルマル・シユベリユール アグレガシオン
スキッテの超エリート校 高等師範学校 の出身で大学教授資格試験に合格し、地方のリセの哲学教授となるが、マルクス主義に特別の関心を寄せるに至り、平穏な学究生活に満足せず、一年間の休暇をとり、生来の病身にも拘らず労働の苦痛を「からだ
で味わう」ため工場に労働者として飛びこんだり、左翼政治運動に参加し、スペイン内乱にも義勇兵として共和政府軍側に従軍し、革命と内乱の苛烈な現実
に深い幻滅を味わう。(早くからスターリン体制に鋭い批判を加えていたヴェイユはむしろアナーキスティックな自由共産主義者とでも呼ばれるのが
適当であろう。) その頃からキリスト教(カトリック)の信仰がよみがえり、その後も政治的社会的発言は止めないが、信仰はいよ

いよ深みを加え、ナチ・ドイツと闘うドゴール將軍の自由フランスに参加を願いつつロンドンで1943年絶食して客死した。

以上によっても察せられるように、彼女の生涯を貫くものは並はずれた純粋さであった。その類まれな純粋さが彼女をして思索の世界に留まることを許さず、病身に拘らず一労働者として工場にとびこませたり——結果は僅か数カ月間の工場生活中に再三病氣療養を余儀なくされ、「身も心もこなごなになって」やめなければならなくなる——、女性の身でスペイン内乱の戦場に義勇兵として赴かせたり——これも出陣後数日を出ずして炊事中足に大火傷を負い後方病院に身を横たえる始末となる——することとなる。同じ純粋さが彼女をして早くから国家としてのソヴィエト共産主義への容赦ない批判を加えさせ、またスペインでは共和国軍の非人間的行為に深刻な衝撃を受けさせる。(敵味方の区別のつけにくい内戦においては捕虜はもちろん、敵側の疑いある住民は即刻銃殺するのがむしろ通例となる。両軍ともそうしなければ自分が殺される危険に常にさらされるのであり、恐怖は残忍を生み、悪循環はとどまるところを知らない。)

さて、私の言いたいのは次のことである。私は思索の世界に留まりえず工場生活にあるいはスペイン内乱に身を投じた彼女の純粋さに頭を下げるし——それにしてもあまりに場ちがいで、いたましい感じがするが——、またそのなかで彼女が為した国家としてのソヴィエト共産主義への批判やスペイン革命への幻滅には多くの点で同感でもある。「革命の幻想は、力による被害者が力を手にしたときには、その力を正しく行使するだろうと想像するところにある。」「彼女の批判はすでにはやくも、一切の政治体制そのものの成立根拠の中にひそんでいる根源悪、国家という抑圧の機構そのものもつ非人間性を見とおした上での立論であった」との著者の言葉(そしておそらくヴェイユの思想)に含まれる批判は鋭い。

しかし鋭い批判者がつねによき実践者であるとは限らない。並はずれた純粋さは、おそらく著者も気付いているように狂気に通じてもいる。事実ヴェイユの最後は狂死としか言いようがない。

そのように言うことは必ずしもヴェイユの偉大さをそこなうものではない。そもそも天才と狂気とは紙一重なのであり、私はヴェイユの宗教家としての、あるいは哲学者としての偉大さを否定するつもりはない。しかし彼女の政治的社会的発言となれば、その妥当性には限界があると私は考える。

一、二の例を挙げよう。私も一切の政治体制にひそむ根源悪を自覚し、その肥大化を警戒することは極めて肝要であると考えているが、——そしてこの自覚と警戒心が従来乏しかったことを認めるが——、さりとて政治体制なしには原始時代はともあれ、われわれは生活できないのである。アナキストの国家なき共産主義の理想がいかにも美しくともそれを20世紀の政治的課題とすることには首をかしげざるをえない。ヴェイユが支持したスペイン・アナキストは現実には、どうしようもない自己矛盾のうちに自滅してし

まった。ヴェイユが平和主義の立場からミュンヘン協定に賛成した事実にも同じ現実無視が露呈している。

純粹さを一途に追求することは思索の世界では許され、あるいは美德ともなるであろう。だが現実世界で一途に純粹さを追求することは常によりよい結果を生むとは限らない。とくに政治において純粹さ、完全を追求することほど危険なことはないと私は考えている。政治とは善悪の間の選択なのでなく、より小さな悪の選択なのである。

一般論として、ふるくはロマン・ロラン、マルロー、ジッド、最近では、サルトル、ヴェイユなど、文学者、哲学者の、文学的哲学的発言ではなく、政治的発言がもてはやされる傾向がある。たしかにその内容には鋭いものが少なくなく、その限りで紹介に値するといえるし、政治の側で反省の資とすべきであろうが、そこには上述した大きな危険もあることに受取る側も留意する必要があるだろう。

ウィリアム・シェリダン・アレン「ヒトラーが町にやつてきた」、番町書房、昭和43年邦訳題名は書店の希望によるものか否か知らないが誤解を与えやすい。原著は「ナチスの権力掌握。1930年から35年に至るドイツのある都市の経験」という題の学術書であり、著者はアメリカの少壮歴史学者である。

題名から知られるように、本書はドイツの一小都市ターブルク（これは架空の名で実際は、ゲッチンゲンの近くにあるノルトハイムの町であることが、本書が有名になったのち判明した）の町で1930年から1935年の間に何が起ったのか、を实地調査したものである。ヒトラーが政権についたのが1933年であるから、そのことは逆にいえば、ナチスとはドイツの一般民衆にとり何であったのか、ナチズムの何がドイツ民衆をひきつけたのかを典型的一小都市をとりあげ、徹底的に調べようとしたものである。

内容は多岐にわたるが、興味ある事実を2、3紹介すれば、1930年9月の経済危機後の最初の選挙でナチス党は12議席から107議席に躍進し、ターブルクでも1928年の123票から1742票に急増するが、社民党もむしろ増加しており、結局従来棄権していた人々と分派小党（ドイツ国家人民党、ドイツ国家党など）に投票していた人々の支持をナチス党は集めたこと、——ただし恐慌がさらに深刻化すると社民党の支持者を食うに至るが、反ユダヤ主義についてみれば、この町ではそもそもユダヤ人問題は従来重要問題となって来なかったし、ナチス党の指導者もそれを感じて宣伝上ではとくに強調はしなかった。「ターブルク市民は反ユダヤ主義に感染していったが、それは彼らがナチスに惹かれたからであってその逆ではなかった。ナチスを選挙で選んだ人々の多くは党の反ユダヤ主義をあっさりとは無視したか、なんとなくごまかしていたのである。それはナチスのそのほかの、不愉快な面とかかわりあわなかった態度と全く共通していた。」

ヒトラー青年団に入団した青年たちはそこに何を求めていたのか。そのうちの一人はこう語っている。「理由はただ、国民的理想を追求できる青年グループにはいたいと

いうそれだけのことです。ヒトラー青年団はキャンプ、ハイキング、団員の夕べなどをやりました。……政治的な教育はあとになってつまりヒトラーが政権をとってからはじめて行なわれました。……みんな、こういう心を湧き立たせる行動をほかの仲間と一緒にできる可能性を求めているのでした。……私たちは自分たちが何をしているのか完全には自覚していませんでしたが、たのしみもありましたし、また自分たちが重要な人間に思えました、ヒトラー青年団というと政治的狂信者の集団のようにとらえるのは誤りであり、むしろ当り前の青年が何らかの行動と連帯を求めて入団した事情がうかがわれる。また現代の疎外のなかで、歯車の一つになることに抵抗し、主体性をとりもどしたいと願っている青年の心理が最後の一句にこめられているように思われる。大人たちのナチス支持にはまた別の要因があったであろう。著者は「あるすぐれた観察家」のつぎのような言葉を紹介している。「ナチスにはいった大部分の人々は経済問題が一挙にすばっと解決されることを望んでいたのである。さらに、人々は鋭い、きびしい明快な指導を求めているのであって——議会の政党政治がいつまでも政治的闘争をつづけていることへの反感を覚えているのである。」

しかしそうしたひとたちはナチスの暴力をどう考えていたのであろうか。どうしてそれを許容するに至ったのであろうか。著者の結論を要約すればこうである。「1930年から33年まで、タールブルクの政治的な殴打事件（ナチスと社民党の支持者の間の）は37件を下らなかった。そのうち四つはかなり大きな戦いだった。……侮辱事件は毎日の事件だった。……タールブルクは眠ったような地方小都市から、爆発する暴力事件の中心地にのし上っていた。……3年間の暴力沙汰の遺産、無数の頭蓋骨破裂、口唇裂傷、目の黒あざなどの影響はさまざまであった。むしろ、こんな暴力沙汰のどれ一つとって何かを決定したことはなかった。むしろそれらは政治的緊張の原因をつくっただけであった。しかも町の人々は、これらの衝突によって測り知れない怨恨を抱かなければならなかった。もはや平和裡に何一つ調停されないで、市民たちは、政治的な意見の相違を腕力で決することに慣れてしまい、それを期待するまでになった。秩序を愛する人たちは、たえずくりかえされる殴りあい嫌悪を感じていたが、しまいにはそれらに不感症になってしまった。これでもってヒトラーが権力の座についたとき、ナチスによる組織的な暴力とテロの使用への道がひらけたのである。」

著者の結論に対し賛成しえない人もいるであろう。本学には戦前のドイツにながく住んでおられた先生もおられるようなので、一度体験をうかがってみたいと思っている。

(1969. 5 平瀬徹也)